
魔法少女リリカルなのはS t r i k e r S 融合する力を持つ者

リュウガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 融合する力を持つ者

【Nコード】

N6590I

【作者名】

リュウガ

【あらすじ】

これは・・・家族を殺され、憎しみを背負いし1人の戦士の物語

世界という壁を軽々と超え、今、彼は何を見つめるのか・

・・・?

少年はまるで夢を見ているかのようにその石を見つめた・・・
この黒く、そして赤い石は・・・
ゆっくりと手を伸ばし、それを掴んだ・・・

その瞬間、石は真紅の輝きを放ち、当たり一帯を赤く染めた
少年は頭の中に流れ込んでくる映像ビジョンを見た

顔の真横で両拳を握り締め、そして、敵を見つめ両腕を前に突き出し、左手を斜めに突き出した

そして、左手を徐々に反対側に円を描くように持って行き
腹部で握り締めている拳と共にもう一度斜め右に突き出した
すると、体から真つ赤な閃光が煌き、当たり一帯を覆い隠した
そして、その場に立っているのは鎧を身に着けた自分だった・・・
左胸には変なマークがあるが気にしない。

顔を覆うようなバツタの兜・・・
そして、拳に付属している真つ黒な籠手・・・

無我夢中で入り込んできた映像通りの事をする。
拳を握り締め、敵を見つめ両腕を前に突き出し、左手を斜めに突き出した

左手を徐々に反対側へと円を描くように持って行く・・・
握り締めた拳と共に、もう一度斜め右に突き出した
そして「変・・・身！」と叫んだ

すると、少年は黒い戦士へと変わり、男と対峙した・・・

『まさか・・・覚醒されるとは・・・』

『待て！！逃げるな！！！！』

男は素早く逃げ出し、後を追おうかと思っただが、体が動かない……いや、動いてくれない……。そして、少年はその場で気を失った……

時は十年と一ヶ月流れたと言った所か。

少年もすっかり大きくなり、もう高校生……

「おい、もうそろそろ行くぞ？」

「分かってるよ。」

彼の恩師とも言える師匠との出会い……

そして、彼の元で共に戦った彼の記憶は誰にも変えることの出来ないかけがえの無い思い出……

彼は二歳年上で、同じ高校生である。

純白のポリエステル100%の制服は美しく煌き、彼を幻想的に見せている

少年達は歩き出し、ゆっくりと言った

「行こうぜ。良介。」

「うるっさいぜ。一刀せんパイ。」

だが、彼等はまだ知らない・・・
これから巻き込まれる運命に・・・

「話 めんどくさい事から逃げ続けると色々と面倒（前書き）」

「ってな訳で、受験勉強にむしゃくしゃしたからもう一度更新！！」

良介「駄目人間だな・・・」

一刀「ってか、学校は？」

「インフルエンザで学級閉鎖。」

一刀「・・・そうかい。」

良介「ってか、俺が15歳って・・・」

「だいじょーぶ！お前が行くのはまだ先だ。」

良介「は？」

「ってな訳で、融合する力を持つ者！いきまー！す！」

一話 めんどくさい事から逃げ続けると色々と面倒

皆さん、こんにちは。

もしくはおはようございます。

こんばんわ。

俺の名前は「西田良介」だ。

俺の真横を歩いているこの人は俺の憧れにして、最高の親友にして、戦友。

同時に、俺の恩師である「北郷一刀」だ。

俺達の出会いは突然で、俺が自暴自棄になってた頃に出会ったんだ。俺よりも強い奴は居ないって思っつて、喧嘩売つたら

ポコポコにされた・・・

異端の力を使つても勝てなかった・・・

それが何よりも悔しかった・・・

でもな、一刀も俺と同じ異端の力を持つてて・・・
それで、いきなり俺を見下すように「俺と一緒に来るか？」って言うてきたんだぜ？

最初の頃は絶対にポコポコのポコ雑巾になるまで痛めつけてやろうかと思つてたけど・・・
今じゃ違つんだ。

な、なんて言うんだらうなあ・・・
ええつと・・・

そう！友情！！！！！！

俺達に友情っぽいのが生まれ始めたんだ！
でき、困ったときは助け合って・・・助けられての繰り返しをやっ
てたんだ・・・
勉強は全然分からなかったけど、一刀が教えてくれたんだ。
俺も一刀みたいになりたいんだ・・・
なんか・・・正義の味方っぽい奴にさ！！！！

「おい、さっきからぶつぶつ何言ってるんだ？」

「ふえ！？あ、いや・・・」

「はぁ・・・お前、テストはまだまだ先の筈だし、見たいアニメも
やってねえし、やりたいゲームもまだ発売されてねえだろ？」

「ち、^{ちげ}違えよ！！！！俺をオタクみたいな言い方すんな！！！！そうだ
けどな！！！！」

「認めるんかい！！！！！！」

一刀の突っ込みを受け、俺達はゆっくりと聖フランチェスカ学園の
校門をくぐった

この学園はちよつとした理由がある。

実は、この高校、一刀が入る年に共学になったのである。

それで、男子の数はおよそ一クラスくらいしか居ないが、まあいい
所だ。

お嬢様達の通うこの学校は正直虫唾が走ったが、一刀に肅正（武力
で）されたので今ではちよつとトラウマだ。

「んじゃ、二年はあつちだから。」

「おうさ。んじゃ、俺はクラス表でも見に行くか。」

「刀と離れた瞬間だった・・・」

俺から真っ黒な影が現れ、俺を包み込んだのは・・・

はい、皆さん。

ここで質問です。

俺は一体、何をしてるでしょーか？

正解は……

「落————ち————て————る————!!!!!!」

そうなんです！空からまっ逆さまに落っこちてるんです！！

しかも！！下を見るとめっちゃ嫌な予感が止まりません。

だって、なんか焦げた臭いするんだもん。

なんか焼けてるもん。

下が真っ赤に燃えてるし……

空港かな？んなのどーでもいいわ！！！！

なんとか解決策を一秒で考え出さねえと……

「よし、面倒だから突き破るか。」

ヒュッとその場で回転し、足を地面へと向ける

そして、自分の目の前に出現させたのは青、赤、白が混ざった俺の特殊ツール。

「行くぞ、ストライク!!!」

H E N S H I N!!!!

すると、俺の制服が別の服へと変化し、まるで鎧の様な装甲が俺にくつつく

C h a n g e!! S t r i k e F o r m!!

「でりゃあああああああ!!!」

良介の蹴りは火の上がっている空港(?)の様な場所の天井を貫いた

そして、彼はゆっくりと着地し、辺りを見回した・・・

逃げ遅れた人がたくさん居る・・・

「ちっ!!!めんどくせえな!!!」

逃げ遅れた人達を見つけ、その場で叫んで状況の説明をした

しかし、非常口のドアが動かなくなってしまう、おまけに、火もあがってしまい、動けないそうだ・・・

「くっそ、面倒な事ばかりだな!どいてろ!一気にぶち抜く!!!」

良介は新たに緑色のツールを取り出した
そして、言い放った

「ストライク、ランチャー!!強化変身!!」

H E N S H I N ! ! ! !

C h a n g e ! ! L a u n c h e r S t r i k e F o r m ! !

「派手にぶち抜くぜえ!!!!!!」

そして、非常口の扉に銃口を向け、引き金を引いた
銃口から凄まじい一撃が発せられ、非常口のドアを軽々と貫通して
いる……

というか、外まで丸見えである。

「今のうちに行きな!!俺は他探す!!!!!!」

良介は急いで他の場所へと向かった
そして、彼の向かったの場所には一人の少女が居た

「お父さん……お姉ちゃん……」

空港で、逃げ遅れた少女が一人……
ただ、歩いていた……
涙を流し、誰かを探している……

刹那、彼女の近くが爆発し、少女は軽く吹き飛ばされ、女神の像の前に転がった……

「痛いよお……熱いよお……こんなヤだよお……帰りたいよお……」

しかし、少女はまだ気づいていないようだ、女神の像にヒビが生じ、今にも倒れそうな事に……

「誰か……助けてえ……！」

刹那、少女の後ろにあった女神の像のヒビが広がり、像が少女に向けて倒れてきた

そして、影が近くなることに気づき、後ろを振り向き、目をつぶった

(もう……私……終わっちゃうの……?)

だが、少女を抜き去り、一人の少年が女神像へと助走をつけて走りこみ……

「鳳凰天駆!!!!!!」

少年の周りに炎が発生し、女神像にまるで鳳凰の様に蹴りを放った女神像は木っ端微塵に消し飛び、破片がぱらぱらと落っこちている

「お兄ちゃん……誰……?」

「通りすがりのお人よしだ。覚えておきな。」

ゆっくりと近づいていき、くしゃくしゃに頭を撫でた
すると、良介と少女を囲む様にピンク色のバリアが張られた

「良く頑張ったね・・・偉いよ。もう大丈夫だからね・・・安全な
場所まで、一直線だから！」

おい。俺はどうなるんだよ？

・・・くそ、炎が邪魔で顔が見えねえし！！

KY（空気よめ）やこんチクシヨウ！！

はっと目線が合わさった

白い服に・・・ツインテールが印象の女の子だ・・・

歳は・・・そう変わらないな。多分。

「き、君は・・・？」

「さっきも言ったが、通りすがりの馬鹿だ。覚えておけ。」

ん？自分のこと馬鹿って言って悲しくなかった？

別に、俺は興味ねえし。

おまけに、どうでもいいし。

勉強なんざしなくても、人間生きていけるんだよ！！！！

これ書いてる作者みたいにな！！！！

（すいませんね。 By 作者）

「そっか。君、魔法使える？」

「使えないって言ったら嘘になるな。」

「じゃあ、飛べる？」

「飛ぶなんて、そんなの寝るのと同じくらい簡単だぜ。んじゃ、俺は別の人助けてくるわ。んじゃな。ツインタールさん。」

ゆっくりと立ち上がり、変なバリアを抜け出す。

そして、今度は別のツールを取り出し、空へと掲げた

「ウイング！！！」

H E N S H I N ! ! ! C h a n g e ! ! W i n g F o r m ! ! !

そして、俺の背中から真っ白な翼が生え、ゆっくりと飛んだ

「まだ救助できてねえんなら先に言っておく！今から2分後にこの辺り一体がビチャビチャになっても知らねえからな！！！」

「え！？ちよつと待ってよ！！！」

「急げよおお！！！！！」

そついい残し、俺は去っていった

俺は即効で拳を握り締め、天井を殴った

ポコオツと瓦礫が崩れ、簡単に外へと出れた

だが、下から人の気配がした・・・

まだ小さい・・・さっきの女の子と良く似た波動だ・・・

「俺って、つくづく苦勞人だな・・・」

そういい、一度ぶち抜いた天井からもう一度侵入し、下の方へ向か
つていく

つづく

一話 めんどくさい事から逃げ続けると色々と面倒(後書き)

なんか、むしゃくしゃするから明日にでももう一度更新するかもし
れません。

それでは次回「日本のカブトムシってどうしてあんなカッコいいん
だろっ?」

キャストオフ!!

良介「まさかのカブトネタ!?!」

一刀「テイクオフとかでもいい気が・・・」

気にしちや終わりぞ。

二話 日本のカブトムシってどつしてあんなカッコいいんだろっ？（前書き）

良介「ってかさあ・・・なんでこの作者の小説の始まりって大抵シリアスタッチなわけ？」

一乃「知らん。脳内も心の中二病だからな。」

「うっせえぞ。」

二話 日本のカブトムシってどうしてあんなカッコいいんだろっ？

良介が再び空港に侵入し、最後の一人と思われる生命波動のある場所目掛けて飛んでいる

しかし、気づけば、もう一つの波動がこの先に居るではないか・・・
捕まると面倒だと考えた良介はその場で着地した
そして、新たなツールを取り出した

「まあ、これを使えばいい話か。アクセル！チェンジ！！！」

- CHANGE! Acceleration! -

さっきまでの翼は羽根のを撒き散らし消えた
そして、今度は胸部の装甲が肩へと展開し、中のリミッターがむき出しの状態になった

アクセルフォームになった所で、右腕に付属されているリストウオッチのボタンを押すと

- Start Up - という電子音声が鳴り響き、良介は人では決して見えない速さで波動のある場所へ向かった

「スバル きゃあ!？」

自分の妹を探しに小さな身体で必死に探す・・・
たとえ小さな一歩でも一歩に変わりは無い
ただひたすらに自分の妹を探していた・・・

「お姉ちゃんが・・・すぐに助けに行くから・・・」

すると、上の方から誰かが彼女を呼び止めた

「その子、じっとしてて！今、助けに行くから！」

だが、少女の足元にヒビが表示、少女もろとも落下しようとしてい
るではないか・・・
そんな時だった・・・

何かの電子音が聞こえたのは・・・

3・・・2・・・1

Time out

電子音が止まったと思ったら、さっきまで落ちようとしていた少女
が消えている・・・
一体どこへ・・・？

「大丈夫か？」

すると、彼女の真横でお姫様抱っこで女の子を抱えている一人の少
年が居た

展開していた装甲は消え、元の聖フランチェスカ学園の制服に戻っ
ている

だが、その姿はまるで太陽の様に煌いていた・・・
女の子をおろし、服についた煤すすや土ぼこりを叩き落とし、ゆっくり
といった

「よし。んじゃ、帰りはあのお姉さんと一緒に行きな。」

「え……あ、あなたは……？」

ゆっくりと去ろうとした少年の後姿を眺めながら言った
少年はふっと笑い、静かに言った

「通りすがりの……魔道師(?)だ。覚えておけ。」

そして、その場でまたウイングのスピリット(本人命名の特殊ツール)を手に取る

「変身!ウイング!!」

H E N S H I N ! ! ! C h a n g e ! ! W i n g F o r m ! !

そして、二分経過した事を確認し、また天井に穴を開け、そこから出て行った

その姿を後ろから見ている二人であった……
その頬はほんのり朱色に染まっている……

「あかん！そろそろ持ちこたえられなるわ！！！」

必死に前線指揮を行っている少女も必死で指揮している。

そんな時だった……

暗いよるだと言つのに青く輝く光があるではないか……

光の根源を見ると、見た事の無い魔法陣の真ん中で誰かが呪文を唱えていた

その声は彼女達にも良く聞こえた

『海の神ポセイドンよ！愚かなる炎を全て鎮火せよ！！！！』

すると、近くの海からまるで海の神ポセイドンの様なとても大きな水でできた鯨が現れた

そして、炎を飲み込むかのように勢いをつけているではないか……

『ポセイドンウェーブ！！！！！！』

鯨は炎に喰らいつき、そして当たり一帯にまるで雨の様に水がポタポタと垂れていく……

こんなオーバースランク以上の魔法をどうやってと考えながらも、その少年へと視線を向けた

すると、少年はふらっと揺らぎ、その場に落ちていつてるではないか……

「あかん！あのままやったらあかん！！！」

少女……八神はやてはその場で走り、彼の落ちるであろうポイントへ急いで向かった

(くっそお・・・変身しまくって魔力消費しまくった上に・・・最近ガン　ラ徹夜で作ったから・・・眠い・・・くそっ・・・あ。下が海だしいいか。海の上で寝るってのもオツだよなあ・・・)

ピューーと落下しながらそんなことを考えている良介をまるで抱きかかえるように誰かが掴んだ

「お、重っ!!!?」

(誰だよこんチクショウ・・・俺の眠りを妨げるのは・・・)

「大丈夫ですか!?!」

はやてが真剣に心配しているが、本人はただ寝たいと言う願望しかないので、ゆっくりと目を開け言った

「なんだよ・・・ずっと徹夜で疲れてんだ・・・分かったら放しなさい。俺は海の中で静かに眠るんだ・・・そりゃあ貝の様に・・・
ZZZZZZ」

「何言うとんねん!!死んでまうやろが!!!!」

「私はあ……貝にい……なりたい……ZZZZZ」

「なんで一時期有名になった映画の題名言ってるんや!!!!」

しかし、彼を支えているだけというのにどうして自分の力が吸われるように消費されていくのだろう……？

そう考えながらも、必死に陸地へと運ぶ
しかし、当の本人は完璧に眠っており。

いびき声が聞こえている……

「なんやねん……さっきの見たこと無い魔法陣も……おまけに、あんな魔法も見たことない……」

「ZZZZZZZZ……一刀お……今度こそ俺がボコボコにい……
・ZZZZZ」

「一刀つて誰やねん……まあええ。鎮火の協力感謝やね……
ういえば、この服もこら辺じゃ見かけんなあ……次元漂流者か
な？……まあええ。とりあえず、取調べもかねて、保護しますか。」

そんなこんなで、西田良介、保護。

「ふあああ〜〜〜。」

「あつ、起きた？」

ああ、良く寝た・・・

つつても、大体1時間位だろうけど・・・

「あれ？一刀、お前いつから女っぽい声に・・・って、はあああああああ！?!?!?!」

目の前に広がっている光景は俺が変な車に横たわらされて寝ていた
って事だけだよ！

ってか、ツインテールさんと金髪さんも居るしー！ー！！！！

何これ！？何この状況！？

「ええつと・・・良介君だったよね？」

「んあ？そうだけど・・・ってか、ここどこ？俺は今日高校の入学
式だったんだけど・・・」

「やっぱ次元漂流者か・・・」

次元漂流者って何！？

結局何さ！？何！？俺をそんなに追い詰めて楽しいか！？

「ええつと、じゃあ、最初の質問ね。あの魔法陣って何？見たことないんだけど……」

最初はツインテールさんからの質問だな。
ラジオっぽくは言っていないぞ。決して。

「そりゃそうだろ……あれ、俺のオリジナルだし。」

「お、オリジナル!？」

え？オリジナルの魔法陣ってそんなに珍しいの！？
俺はそっちにびっくりだよ？！

「え？何？つまり、この世界の魔法陣って……なんか、星見たいな形とかしてんの？」

「まあ……大抵みんなそやね……」

「それじゃあ二つ目。翼が生えたり生えなかったりするあの道具は何？」

今度は金髪さんからの質問だな。
翼が生えたり？

……ああ。スピリットね。

「スピリットの事？ありゃ、英雄やら何やらの力を使えるだけだ。」

「そうなんだ・・・」

何？なんで少し顔赤くするの!？

赤面症なんですか!？病院いってください!

「んじゃ、俺から質問。ここって地球じゃないよな？」

「え？」

おつ、やっぱり思ったとおりだな・・・

簡単だな。俺を舐めるなよ・・・

伊達に一刀と私立探偵なんざやってねえぜ・・・

まあ、客はほとんどクラスメイトとかだけだな（笑）

「あゝ。んじゃもつと狭めて・・・ここは俺の知ってる世界じゃない。俺の知ってる世界だったら何回か見たことあるし、仮に地球でも、俺の知ってる場所じゃない。」

「正解や・・・えらい洞察力やな・・・」

「当然。探偵兼高校生ですから。」

少し地面っぽく言ってみたり（笑）

そして、かれこれ話して分かったことがあった。

ここはミッドチルダと言う所らしい。

それで、时空管理局という場所があり、さまざまな世界を管理して

いるらしい。

まあ、こんなちっぴけな事あいんだけどな。

だってそうだろ？世界ってのは無限に広がっていく・・・それを全て管理するのは不可能。

おまけに、俺の知ってる世界はかるく30は超えるからな。

ここは仮面ライダーやら、機動戦士やら、この世界に良く似た世界やらがたくさんあるのだ・・・

懐かしいなあ・・・

夏休みに、一刀とぶらぶら遊びに行つて・・・戦争終結させたり・・・

色々あつたっけなあ・・・

「で、俺に何をしろと？質問は受け付けないけどな」

「簡単や。時空漂流者の君を保護したいねん。ウチははやて。八神はやてや。よろしゅうな良介君。」

そつと手を差し伸べてくれたから・・・

まあ、一樣握手するのが普通だよな・・・

「ああ。よろしく。」

「私は高町なのは。さっきはあの子を助けてくれてありがとう。」

「私はフェイト・T・ハラオウン。デスタロツサよろしく。」

・・・今気づけば、三人ともそつとう綺麗だぞ・・・
数年後に期待って事でいいか。

そして、西田良介となのは達は出会った・・・
しかし、物語はまだ始まったに過ぎないのだ・・・
これから始まる・・・物語を静かに見守るとしよう・・・

二話 日本のカフトムシってどうしてあんなカッコいいんだろっ？（後書き）

良介「次回予告！」

一刀「良介の居なくなつた世界では、俺が良介と同じで別の世界へと飛ばされてしまった！そこはなんと、三国志の武将達が皆女の子になつてしまつた世界だつた！」

「ちなみに、一刀のストーリーねえから。終盤で関わってくる程度だ。」

一刀「え？何この差別？」

良介「次回！「模擬戦」・・・あれ？俺、良くも悪くも死ぬんじゃない？」

「大丈夫だ。お前は死なん。一刀よか弱いけど、最強設定なのは変わってないから。」

良介「・・・一刀がいるのに最強って言うのだから・・・」

一刀「さあな。」

三話 模擬戦

よう。俺は西田良介。

入学式の変な時に変なのに飲み込まれて変な世界に落とされたんだ。

で、消化を手伝って、眠かったから寝たら目の前には三人の俺と同じ歳の少女達が居たのだ！

それで、俺はなんか変な約束をして、俺の世界に戻ってきたのである。

約束が知りたい？

じゃあねえな……

『もう帰っちゃうの？』

『まあな。俺がここに長居する意味ねえし。ま、高校が終わったらこっちに来るさ。』

俺がオリジナルの魔法陣を展開しながら言った

呪文を唱え、そして目の前に真っ黒な回廊が開かれる

まあ、本当は呪文唱える必要もなければ、魔法陣も展開しないでいいんだけどな。

だって、なんかそっちの方が強そうじゃん？カッコいいじゃん。

『あ、あのさ！良介君！！』

『んあ？何？』

すると、闇の回廊を潜ろうとした時だった
なのはに呼び止められたんだ

『今度会ったら、模擬戦やらない？良介君の実力・・・知りたいんだ。』

『ええ〜？面倒じゃん。パス。』

模擬戦なんてかつたりい。

だってあれじゃん。なのは強そうじゃん。攻撃痛そうじゃん。
手をあげて徹底的にパスした。

『お願い。』

そんな手を合わせてこつちを見ないでください。

ホントやめてください！なんか俺がなにか悪いことやらかしたみたいなことになってるから！！

やめて！！はやくもフェイトもそんな目で俺を見ないで！！！！

『わアツたよ！！やりやあいんだろ！！やりやあ！！』

こつして、俺は一番約束してはならないことを約束したのであった。
・・・

「おい、西田ー」

所変わって教室。

俺の席の後ろの奴が話しかけてきてるな

「なんだ？」

「“なんだ？”じゃないだろ。お前、入学式に遅刻って・・・」

「うつせえ。」

そんな会話を楽しみながらも、俺達は担任の先生を待った

そして、また場所は変わり2年生の教室

「おっ、かずピーと一緒にや！」

「はぁ・・・また変態ダメガネと一緒にかよ・・・」

「誰がダメガネやねん！！！！シルバーソウルか！？シルバーソウルなんかいな！？」

「しつこいぞ。」

一刀は少々呆れながら馬鹿（及川）と会話を続けた
ブウツと携帯のバイブレーションが響いたので、ゆっくりと開くと

「有馬哲平」からと書かれたメールが一件。

「直江大和」と書かれたメールが一件来ていた・・・

タイトルばかりに気を取られてはいけない。(キャラ紹介です。)(前書き)

前回のお話は本当はなのは達との模擬戦の予定だったのですが、面倒だったので、気が向いたときに・・・

良介「おい・・・(怒)」

タイトルばかりに気を取られてはいけない。(キャラ紹介です。)

西田良介 男 15歳

この物語の主人公。

性格は突っ込み気質(?)の苦勞人(笑)

恋愛に関しては無知・・・と言うか、恋愛と言うものをした事が無い。

5歳から7歳にかけて一人で生きていき、孤独を誰よりも知っている。

7歳の時に一刀に出会い、彼の修行(一刀の祖母のいいつけ)に同行し、信じあえる仲間兼親友になった。

実は、13歳の時に、一刀が大切な相棒を自分の手で封印したことを知っている。

武器は7歳の時、一刀から譲り受けた神斬刀シンザントウ式(木刀)である。

基本的に魔法を使わず、神斬刀で切り込んでいく

異端の能力「エボリユーション」を使い、自分の想像した英雄ヒーロー(仮面ライダー等)の能力を使うことができる。

実は体中に傷跡があり、一刀から渡されたプロテクターをつけて生活している。

(ちなみに、プロテクターは自分の強さによって重さが変わる)

騎士道精神は無いものの、彼は自分の武士道ムシドを生きるのがいいらしい。

自称「未来の一刀の相棒」らしい。

魔力、体術、剣術を総合しても、軽くSSSSSSランクは超える。というか、計測不能。

プロテクターを着けた状態でも、SSS+ランクはある。

口癖：「通りすがりの・・・」

「知るか！」

北郷一刀 男 17歳

良介の恩師にして師匠とも言える人物。

彼に色々な技を教え、辛い道のりを共に歩んできた仲間兼親友である。

良介を一撃で倒すという実力者である。

彼に剣術で挑めば一秒でKOされてしまう。（良介談「俺よかチートだろ」だそうだ。）

全てにおいて良介を上回っており、良介の憧れの的兼、よきライバルになりたいらしい。

15歳の時に、自分の最高の相棒「東上始」を自分の手で封印し、始の分まで生きていくと決めたらしい。

実は、北郷は今の姓だが、昔は祖母達に育てられていたため、「天道」という姓だった。

魔力、体術、剣術を総合しても、やはり良介と共に計測不能プロテクターをつけて生活している。

武器は神斬刀である。（昔は二刀流で戦っていたが、一本を良介に渡している。）

東上始 男 17歳（カードに封印されていなかったら）

一刀の相棒。

そして、良介が狙っているポジションである「相棒」の称号を持つ。一刀とは違い、接近戦ではなく、長距離、中距離からの攻撃を得意とする。

実力は一刀と互角。良きライバルである。

15歳の時に、一刀との死闘の末、一刀に封印されてしまった。今では、一刀が肌身離さず持っているJOKERのカードに封印されている。

「大体こんな感じかね？」

良介「知るか。」

「一刀「ってか、始はまんまサイトから引っ張ってきたのかよ・・・」

「まあね。だって、名前考えるの面倒なんだもん。」

四話 一々細かいことを気にしてたら身が持たない。

一刀がメールの内容を見ると、そこには同じ中学を通っていた彼の仲間達の今日の出来事が書かれていた

哲平は有馬財閥の養子として迎えられ、昔の「南哲平」ではなく、有馬哲平へと姓を変えたのだ。

大和は、一刀と良介が引越してしまったため、川神に残ったのだ。まあ、一刀、大和、哲平と言ったら、当時の中学校生活で最高の仲間にして戦友だ。

大和と哲平・・・そして、始と一緒に戦争をなくしたっけなあ・・・等と思いながらも、ゆっくりと一刀は携帯電話を閉じた

北郷一刀、直江大和、有馬（南）哲平、東上始、そして、西田良介。見て分かるとおり「東西南北」と言う頭文字なのだ。

この五人の力が合わさった時、とてつもない力が生まれるとか・・・

まあ、そんなふざけた事は東京湾に錘をつけて放り投げるとして、良介は初の高校生活を満喫すること・・・

だが、彼に取り巻く真っ黒な闇はこれから真実と共に・・・ゆっくりと浮き出るだろう・・・

そして、一刀達も知らない世界・・・
その中に、まるでゴーレムの様な物を作っている一人の男が居た・・・
彼を見て一言いえるのが・・・
不気味・・・
その一言で尽きるだろう・・・

「くくくく・・・ふははははははは!!!!!!!!!!」

何十体も生成されるゴーレム・・・
それは、まるで機械の様に量産されており・・・
数えるのも難しい位の量が量産されている・・・
幸い、この世界に人は居ない・・・
だが、それが仇となったのだろう

「完成だ・・・これで・・・管理局の魔導師も手も足も出まい・・・」

コツコツとこちらへ一人の男が歩いてきている・・・
年齢は良介と同じといった所だろう・・・
真っ白な髪に、真っ赤な目・・・

彼はゆっくりと起動しているゴーレムの前に立った

「さあ、デュアル！ゴーレムのテストだ・・・魔法を使って攻撃しろ！！！」

「・・・了解。」

デュアルと呼ばれる少年は静かになのは達の世界の魔法陣を展開した・・・

そして、デバイスを使い、手に剣を出現させた・・・

「・・・暗黒月牙！！！」

剣から放たれた黒い魔法は、一体のゴーレムに向かい飛んでいつている

そして、ゴーレムに直撃するも、ゴーレムはまったく動かなかった
攻撃された場所は少し削れただけだったが、一秒もしないうちに完全に回復した

それどころか、強度が増している・・・

「・・・ブラッディ・スティング・・・」

今度は別の魔法で攻撃・・・

しかし、結果はさつきと同じ・・・

完璧に回復し、また強度を増した・・・

「完璧だ・・・これで、管理局員だろうが・・・なにがこようと完

壁に破壊できる……」

男は静かに笑い、ゴーレムのスイッチを切った

ゴーレムの赤い目は電池の無くなった携帯電話の様に動かなくなった

「デュアル、ゴーレムの調整だ……それが終わったら、ゴーレムの魔法テストを開始する」

「了解……」

そして、この二人はとある野望の為に一步步進みだしていった・

「さあて、今日は色々疲れたあー。」

良介が学校から自分の家へと帰りながら言った
横には一刀が居る。

「で、お前は変な世界に行ったと……変な話だな。お前の能力が

暴走したんじゃないか？」

「んー？そうかも。でも、回廊開いたとき、変な違和感あったんだよな。なんか・・・もう、回廊が開けないみたいな感覚が。」

良介が回廊を開いた時の感想を言った

右手にまるで電流の様に何かが駆け巡り、良介に訴えているように思えた

「はあ・・・もしも、変な世界に行っちゃった時の対処法・・・覚えてるか？」

「適当に旅して、その世界を知れ。」

「適当は要らない。」

良介の適当発言に呆れながらも、一刀達は自分たちの家へと帰った

五話 懐かしい思い出は簡単に思い出せるけど、どうでもいい思い出って簡単に

良介が高校に入学し、数ヶ月が経過した。

ある程度の授業等に慣れ、聖フランチェスカ学園の校門を潜るのが少し楽しくなった時期の事だ…

なのは達の世界に蠢く闇は、どんどんと大きくなり始めていた…
そして、動き始まる闇に、なのは達はまったく気づいては居なかつた…

「ねえねえフェイトちゃん。」

「何？なのは？」

街をあるきながら、なのはがフェイトに質問をした

「クロノ君達、管理局に来るんだよね？」

「うん。仕事でこっちに来るんだって…それに、シグナム達も仕事でここに来るんだって」

久しぶりに集まる面子の顔を思い浮かべながら、二人は街を歩いて

いく

向かう先は管理局本部。

しかし、この本部が狙われていることに、彼女達はまだ気づいては居ない……

「デュアル、ゴーレムの準備は出来たか？」

「……ああ。能力、魔力、技術からとつても、Aランク以上はある。」

「そうか……」

白衣の男は、ゆっくりとデュアルに近づき、頭を撫でた
デュアルはそれを拒まず、ただ、頭を撫でられた……

「デュアルよ、これは私の復讐なのだぞ？お前が協力しなくてもよかつたのに、どうして協力した？」

不思議そうにデュアルにたずねる白衣の男
デュアルは少しぶつきらぼうに答えた

「……アンタは俺の恩人だ。それだけだ。」

白衣の男を見上げ、そして、静かに歩いていった

デュアルはこの男・・・「レイグ・デュアッタ」に拾われたのだ
レイグは元は管理局の有能な科学者だった・・・

だが、ゴーレム計画を提出した所、人間に牙を向いてしまう恐れがある
るので、その計画は廃棄されてしまったのだ。

レイグはそれ以来、何度も講義をしたが、認められず・・・
拳句の果てには、追放されてしまったのだ。

彼は管理局への怒りや憎悪を抑えきれず、ゴーレムを量産したのだ。
・

護るはずだった管理局に、牙を向くことにしたのだ。

その途中、この少年「デュアル」が行き倒れており、助けたのだ。

それ以来、デュアルはレイグに協力し、レイグと共に最後を共にする
という忠誠心を露にしたのだ。

「・・・デュアル・・・」

人を信じなくなったデュアルを助けたレイグ・・・

ただレイグを信用し、彼を全面的にサポートするデュアル・・・

二人の絆は固いのだ

「・・・管理局」

モニターに映る自分の護りたいと誓った場所を見る・・・

しかし、それはもう過去・・・

今は憎むべき場所だ・・・

「・・・デュアル。ゴーレムを全て起動させる。派手な戦いを繰り
広げるぞ。」

「・・・了解。」

そして、デュアルはゴーレムの起動ボタンを押し、ゴーレムを起動させた

巨大な転移魔法を出現させ、管理局の真上へと通路を開いた

「ゴーレムよ!!!私を追放した管理局に、怒りと憎しみを拳を振るってやれ!!!」

レイグはゴーレムに言い放ち、ゴーレム達は転移魔法に乗った
そして、沢山のゴーレムが送り込まれていく・・・

「な、なんだあれ!？」

管理局の近くでは、人が大騒ぎしている

なのは達も巨大な転移魔法を見上げながら言った

すると、巨大な岩の塊の様な人型の岩がどんどん落下してきている
管理局のバリアを突き破り、中に侵入していくではないか・・・

「フェイトちゃん!!!」

「うん!!!」

二人は急いで現場へと向かう・・・

「な、なんだ!？」

クロノは管理局の廊下を歩いていたが、突然の地震に驚き、近くの壁に寄りかかった

窓を見る限り、たくさんの人型の岩がこちらへ向かってきている

「て、鉄壁を誇る結界だぞ!？」

そっつい、急いで中の人達を避難させるように命令した

中からゴーレムの侵入を見ていたシグナム、ヴィータの二人はゴーレムがまだ破壊しきれていない結界に気づいた

この結界は二重にされているのだ。

だが、第一の結界が突破され、現在、最終ラインを超されようとしている

「行くぞヴィータ!!」

「ああ!!--!!」

二人は急いでデバイスを取り出し、ゴーレムを侵入させまいと、必死に戦うことを決意するのであった

そして、場所は変わり、聖フランチェス力学園。

良介は相変わらず、授業をまるで聞いておらず、居眠りをしていた後ろに座っている者達は呆れながら彼を見ていたしかし、呆れ半分、少し得した気分になっていた

良介は性格が少々あれだが、顔はどちらかと言うと、カッコいいのだ。

おまけに、料理も完璧、スポーツも高校生新記録を叩き出したと言う快拳を成し遂げ

拳句の果てには、眠っていても授業の内容は完璧に理解しており、先生がいきなり指差しても、簡単に答えを出してしまうのだ。

キーンコーンカーンコーンと、授業の終わりのチャイムが鳴り響き、授業の終わりを告げた

良介はチャイムが鳴ると同時に起き上がり、大きくあくびをした授業が終わり、良介はふわ〜とまたあくびをし、廊下へと出た

(つまんね〜・・・暇で暇で困る・・・なんか、面白いことねえかな・・・)

そんなことを考えながらも、帰りのHRに出席するのが面倒なので、屋上へあがり、また寝る事にした
屋上はいい風を運んできて、まさに寝るには絶好の場所だった
その場で横になり、静かに空を眺めた
そして、静かに昔聞いた歌を歌った

「重い荷物を」 枕にしたら」 深呼吸、青空になる」

彼の歌が静かに風に包まれ、どこかへと飛んでいく
良介の趣味は、料理と歌を歌うこと。

そこから、スピリットの能力に「スピリットソング」という能力が加わったのだ。

スピリットソングの能力は、良介が歌う曲によって効果が変わり、攻撃力強化、防御力強化、魔力増加、身体能力強化、魔力回復等とたくさんの能力があるのだ。

「目をつぶってても、同じ景色は過ぎてゆくけど、今、見てなくちゃ」 気づけない」

そこまで歌うと、良介はまた眠りについた・・・
しかし、この眠りが、この世界に戻れなくなるきっかけになることを、彼はまだ知らない・・・

「紫電一閃！！！！」

ガキンツ！！！！と剣がゴーレムの右腕を捉えたはずだった・・・しかし、ありえない速度で回復され、また強度を増した

「駄目だシグナム！こいつらの回復する速さが尋常じゃねえ！！」

アイゼンでゴーレムの頭を攻撃するも、ビクともせず、左腕の甲で叩き落とされそうになり、急いで回避する

「ディバイーン！！！！バスターー！！！！！！！！！！」

なのはも魔法でゴーレムを一掃しようと考えてるが、攻撃はゴーレムの堅くなった皮膚当たるも、その場にかき消されてしまう

「駄目！魔法も通用しない！！！！」

しかし、かき消された魔法は、そのままゴーレムの身体に入り込み少し光る

「魔法を吸収してる！？」

すると、ゴーレムの速さはさっきよりも速くなり、シグナム、ヴェイター、フェイト、なのはを襲う

なんとか回避するも、攻撃後ろに居るゴーレム達がまた攻撃をし始めてくる

魔法は吸収され、通常攻撃は皮膚を堅く、凝固にしてしまう・・・そんな敵をどうやって倒すのか・・・？

自分の影から黒い手が現れ、良介を引き込もうとしている……

「な、なんぞこれ!？」

驚きながらも、手を振り払おうとするが、何故か良介には触れない。

・

そして、この手からはなんだか不思議な感覚が送られてくる……

それは「助けて!!」と叫んでいるような声……

ゆっくりと振り払おうとした手を下ろし、また寝っころがる。

これは一様魔法の類であるが、まったく恐怖を感じない……

転移魔法で家に置いている愛刀「神斬刀シンザントウ式式」を手に取った

そして、予備用にとある物をバッグに忍ばせ、目を瞑った

(ま、なんとかなるだろう。)

そう思いつつも、光が無くなり、ふっと何かの脱力感に見舞われた。

・

ん？背中から何か風っぽいのが送り込まれてくるヨ……？

なんか、重力に押し出されてるような感じがするヨ？

つか、髪の毛もなんか不規則に揺れてネ？

これって……

ゆっくりと目を開けると、そこには見慣れていない空……

雲と青が綺麗な空間を包み込んで……

そして、ゆっくりと後ろを向くと……

「って、またこのパターンかよオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!!

「!!」

そう、前回同様、またマツ逆さまに落っこちている。

しかも、下には肉眼で確認できるほどの大きなゴーレム(?)のっぽいのが沢山居る……

それを必死で食い止めようとしてるツインテールと金髪さん……

あれ?フェイトと、なのはだよね?

そう思いながらも、神斬刀を手に取った

「きゃあああ!?!」

はやてがゴーレムの攻撃を受け、地面に落下する……

それを見ていたシグナム達はなんとかしようとするが、ゴーレムが邪魔して動けない……

すると、一体のゴーレムがはやて目掛けてパンチをしてきている……

(あかん!避けられん!!!)

目を瞑り、自分の最後を覚悟した瞬間だった……

シグナム達ははやてのカバーをしようとするが動けない……

ドゴオオオオオン!!!!と爆発音にも似た音が鳴り響いた

ゆっくりと目を開ける……

まだ……生きている……?

そう思いながらも、目の前に繰り広げられている光景に目を疑った
ゴーレムの右腕が無い・・・
それどころか、一体、ゴーレムが真つ二つにされている・・・
そのゴーレムの足元には純白の制服を身に纏った漆黒の髪の方が居
た・・・

手には木刀が握られており、まるでゴーレムを切り裂いたようなポ
ーズをしている・・・

木刀を腰にさしこみ、静かにその場で自分の右手を頬の近くへ持つ
ていき・・・

「俺・・・・・・・・」と小さく呟き

ゴーレムがまるで砂の様にばらばらと崩れていく中、勢いをつけて
振り返り、右手を広げ
左手を後ろに突き出し、言い放った

「参上！！！！！」

それと同時に、ゴーレムは完全に消え去り、砂が良介を輝かせるよ
うに輝いて見えた・・・

その瞬間・・・その場に居た誰もが見惚れていた・・・

その姿はまるで勇者の様に・・・腰にさしている木刀はまるで真剣
の様に見えた・・・

漆黒の髪に決意を露にしている真つ赤な目・・・

西田良介が、その場に降り立った・・・

五話 懐かしい思い出は簡単に思い出せるけど、ぶっでもいい思い出って簡単に

「はい、新作うp。」

良介「結局やらかしやがった・・・」

一刀「つか、もう俺の出番はないと・・・」

「まあ気にすんな」

一刀「気にするわ!!」

「さて、今回良介が歌っていたのは仮面ライダー好きなら誰でも聞いたことがある「青空になる」です。作者も大好きです!」

良介「ちなみに、また本編になんか別の曲が出るかもって噂があるんだけど・・・」

「気のせいだ。んじゃ、次回のあとがきで」

一刀「俺は無視で終わりかい!!!!!!」

六話 カブトムシとクワガタムシでも、それぞれに個性があるからどれが最強か

良介が華麗に参上して数秒・・・

なのは達もいまいち状況が理解できないまま戦闘は開始された。

しかし、ゴーレムは自分たちよりも危険と判断した良介を狙い、一斉攻撃を仕掛けた

「良介！！危ない！！！！」

「大丈夫だ。」

はやてが後ろで叫んでいるが、良介は軽く流し、静かに木刀に手をかけた

そして、まるで居合い切りの様に剣を引き抜いた

「さあて、俺の準備運動の相手になってくれや。魔神剣！！！！」

地面を抉る様に斬りつけると、下にまるで何かの衝撃波の様な物が地面を一直線に進んでいる

ゴーレムは殴って粉碎しようとするが、殴った直後、右腕が粉微塵に消し飛んだ

これは魔法ではない・・・

そう勘付いたので、急いで良介を狙う・・・

「遅いんだよ！！！！蒼波刃！！！！」

すると、今度は木刀の刀身が蒼く染まり、それを切りつけるように放つと、蒼い球体が向かっていき、ゴーレムが一体また消し飛んだ

シユタツと地面に着地し、後ろに居る傷ついた魔導師達を見る。
だらしがないなと思いつながら、剣先を魔導師達へ向け、力を込めた

『癒しよ！ケアルガ！！！！』

ゴーレム以外の人全員にまるで花畑から花が空へと舞うような感覚
になった

すると、痛み、魔力、怪我などが一瞬で回復し、全員戦線に復帰で
きそうになった

「あゝあ。余計なことで魔力消費しちまったじゃねえか・・・」

すると、腰に付けているポーチからグミを取り出し、口に放り込んだ
良介の魔力がたちまち満タンになり、もう一度ゴーレム達の群を見た
ざっと100体以上居る・・・

余裕だなと考え、そして、魔法陣を出現させ、魔導師達全員に言い
放った

「おい！黒こげになりたくなかったら下がってな！とばして行くぜ
え！」

すると、体から黄色のオーラが良介を包み込んだ
剣を構え、静かに呪文を唱えた

『はあああツ！！！！真紅の爆炎！！！！かの者を焼き尽くせ！！！！』

『！』

すると、ゴーレムの中心にまるで隕石が落下するように幾つもの炎
が渦巻いた・・・

隕石は止まることを知らず、まだまだ降り注ぐ・・・

そして、今度は炎の嵐は出現し、ゴーレムは原型をとどめることが出来ず、砂へと変わっている……

『逃のがさない……！インフェルノドライブ！！！！』

最後には嵐がさらに強まり、一気に大爆発を起こした

大爆発を起こした場所はゴーレムだけ全て排除し、他は一切傷ついでいない……

なんていう高等魔法を……

『続いていくぜ！！旋律の戒めいましめよ！西田良介の名の下に具現せよ！
！ミステイクケージ！！！！』

今度は白い球体がゴーレムを縛りつけ、身動きの出来なくなったゴーレムに追い討ちの如く球体を圧縮……
ゴーレムは塵も残さず消えていく……

あっと言う間にゴーレムの数は半分以下になった……
しかし、魔法陣はきえていないので、まだまだゴーレムは降りてくる……

「雑魚いな……俺でなくても余裕じゃね？」

そう言い放つと、木刀を構え、降下してくるゴーレムに向かい走り出した

真下に待機し、ゆっくりと目を瞑る……

そして、目を見開いた瞬間、降下してくるゴーレムと共に何かが発生した

「とばしていくぜえー！」

もう一度黄色いオーラを身にまとい、ゴーレムが着地する前に何かをした……

すると、地面が悲鳴をあげるように地震を起こしている……なぜそんな事が起きているかと思えば……良介の真下に巨大な魔法陣が出現しているではないか……

『はああああッ！！！！』

魔法陣から泉の様に魔力が溢れ出し、降下してくるゴーレムが触れた瞬間、また粉微塵になった……
どんと魔力は止まらず、魔法陣ごと一緒に攻撃している……

『喰らえ……！！レイディアント・ハウル！！！！』

最後に止めを刺すように魔法陣が広がり、近くに居たゴーレムにまで被害を出した……

そして、移動魔法陣も消え、辺りにはゴーレムが3体しか居なくなってしまった……

「なんだよ……つまんねえな……もうちっと粘ってくれよ……」

呆れながら言うと、木刀をもう一度構え、そしてゴーレムに向かった。ゴーレムは最後の抵抗をしてきたが、良介の前では通じず、良介の木刀に斬られ、また吹き飛ばす……

「おいおい、これでも6分の1以下だぞ？せめてゴーレムなんだから、半分くらい本気にさせてくれよ……」

良介が呆れながら静かに言った

ゴーレム達は良介に殴りかかるうとするが、良介は簡単に避ける・

そして、二体のゴーレムを真つ二つにした

最後のゴーレムは右手に全身全霊の力を込め、良介に殴りかかった

「・・・そうか。お前も全力なんだな・・・なら、俺も全力で殴つてやるぜ！！！！ウオオオオオオツ！！！！」

その場で右拳を握り締め、こちらへと向かってくるゴーレムのパンチにカウンターを仕掛けようとした・・・

「喰らえ！！！！ライダアアア、パアアアンチ！！！！」

拳から黒い閃光が生じ、ゴーレムのパンチと良介のパンチが互いにぶつかった・・・

その力は留まることを知らず、風圧が生まれた・・・

ピシッ・・・ピシピシ・・・

何かにヒビが生じる音がした・・・

ゴーレムの右拳から肩までかけて、ヒビが生じている・・・

そのヒビはどんどんどんどんゴーレムに亀裂を居れ・・・

最後には砕け散ってしまった・・・

だが、この瞬間、ゴーレムの赤い目が少し緩み、一瞬だけ安らかな顔になった・・・

「・・・」

ゆっくりと合掌・・・
そして、良介は言い放った

「おやすみ・・・静かに眠れ。」

この瞬間、辺りに居た魔導師達も何故か彼につられ共に合掌した・・・

「な、なんだあの男は！？ゴーレムが全滅！？」

レイグは突然現れた良介の異常なまでの戦闘能力を見つめ言った
隣に居るデュアルも驚きを隠せない・・・
自分のゴーレムは途中までは計画実行まで行った・・・
しかし、良介一人の介入で、ゴーレムが全滅・・・
自分の張った移動魔法陣さえ一緒に破壊し、被害も無い・・・

「嘘だ・・・私のゴーレムには魔法を受けたら絶対に回復する能力
を授けた筈だ・・・」

「・・・だが、あの男には通用しなかった・・・」

デュアルは内心驚きながらもゆっくりと良介を見た
良介の様な魔法陣は見たことない・・・

さらに、あんなデタラメな威力の魔法も見たこと無い・・・
さらに言えば、魔神剣と呼ばれる攻撃、蒼波刃と呼ばれる攻撃も見
たことなかった・・・

(あの男・・・一体何者だ・・・)

デュアルの考えを他所に、良介は怪我人の手当てを始めていた・・・

「あ、あんた一体なんなんだ・・・いででで!!!」

一人の魔導師が足を抑えながら言った
どうやら、捻挫したようだ・・・

「黙ってな。癒しの力・・・ファーストエイド。」

すると、足に花の様な形の魔法が現れ、足の痛みが引いていった
男性は驚きながらもゆっくりと立ち上がった
良介はその場で怪我人が居ないかと探し始め、ある程度の怪我人は
ほぼ回復した

「良介君!!!!」

いきなり名前を呼ばれ振り返ると、なのは達がゆっくりと降下してくる

良介の目の前に着地したなのは達は大丈夫などと心配してくれたが、良介は無傷だった

そして、はやてをかかえながらピンク色の髪の女性が近づいてきた

「すまんが、主はやてが怪我をしたようだ。診てやってくれ。」

「おいおい……一様言つとくけど、ヒーラーじゃねえぞ。」

「つべこべ言わずやれ!!!!」

良介に頼む態度ではないが、赤い服を着た少女が良介を睨みながら言った

はいはいと静かにいい、はやてに魔法をかけた

「癒しよ……ファーストエイド。」

またファーストエイドを唱え、はやてを回復させた……

すると、はやては良介の差し伸べてくれた手につかまり、ゆっくりと立ち上がった

「ありがとうなあ……。あのデツカイのうち等の攻撃受け付けんかったんよ……」

「だろうな。あの皮膚、魔法を受けたら吸収して、通常攻撃を受けたら強度が増すタイプの面倒な奴だからなあ……」

「良介君のは、どうして効いたの?」

フェイトが不思議そうに良介に尋ねた

良介は腕を組み、静かに言った

「蒼波刃とか魔神剣は一樣剣技だし。インフェルノドライブとかは俺の秘奥義だから、滅茶苦茶威力あるしなあ・・・」

「秘奥義???」

なのは達が訳の分からないように言った
すると、良介が簡単な説明をした

「俺がオーバーリミッツで攻撃力とかが高くなつたろ? あっ、オーバーリミッツってのは黄色いアレな。んで、オーバーリミッツで強化された俺の特殊魔法・・・ミスティックケージとか、インフェルノドライブとかな。それが一樣秘奥義。あっ、一樣レイディアント・ハウルも秘奥義だから。」

良介の分かりやすい説明に安心しながらも、管理局から一人の青年が走ってきた

「皆!!!」

『クロノ(君)!?』

「誰?」

良介が誰か分からないように静かに言った
だって、見た事ない人が現れたら誰だって思うことだろうと思いな
がらも、青年は近寄ってきた

「そちらの方は？」

良介を見ながら静かに言った
良介はめんどくさそうに言った

「通りすがりの馬鹿だ。覚えておけ。」

「ええつと・・・次元漂流者の・・・西田良介君や。」

「え！？漂流者なのにあんな魔法使ってたのか！？」

いきなりクロノに驚かれて、良介もビックリしながらも、静かに言
った

「あのさ・・・漂流者って言うのやめてくれ。なんか・・・結構グ
サツてくる・・・」

「あつ、ごめんなさい・・・ええつと、西田さん。」

「いや、さん付けもいいから・・・せめて良介にしてくれ。」

良介の静かなる突込みが炸裂。

クロノは改めて自分の名を名乗った

「僕はクロノ。クロノ・ハラオウンだ。」

「あつ、紹介遅れたな。ウチの守護騎士達や。」

クロノの紹介が終わった後、はやてが静かに自分の後ろに居る二人
が自己紹介をしてくれた。

「シグナムだ。主はやてを守る騎士だ。」

「ヴェータだ。」

「改めて、俺は西田良介。通りすがりの馬鹿だ。まあ、記憶の端っこにでも置いておいてくれ。」

こうして・・・良介達は出会ったのであった・・・
そして、これから数年後に起きるとても大きな事件へと・・・
一歩ずつ確実に近づいていくのである・・・

七話 魔法って便利。

良介が管理局を守り、何故か良介はクロノに連れられ、尋問を受ける事に。

「で、君は別の世界から来た・・・と」

「そうなんじゃねえの？ま、世界なんざ何回も旅してるから別にどおって事ねえけどな。」

「楽観的な・・・しかし、あの魔方陣はなんだ？僕達の魔方陣とは違う様だが・・・」

「だーかーら！俺の魔方陣なんだから、俺と俺の知り合い以外知るわけねえだろうが！まったく・・・キツトツト三世の声にそっくりだったから、面白いと思ったのに・・・」

良介が腕を組みながらうんうんと頷いた
それをわけの輪からなそうな顔でクロノが見ている。

「分かった・・・だが、君はこれからどうするんだい？」

「闇の回廊開いても帰れないんじゃ、しゃあねえだろうな。まあ、旅でもするんじゃねえの？」

「・・・なら、お願いがあるんだが・・・管理局の守護隊に短期で

いいから入ってくれないか？」

「無駄無駄。どの世界行っても、俺よか強い奴だったら、4人しか居ねえよ。入るだけ無駄だ。」

良介がめんどくさそうに言った

すると、クロノは少し困ったように言った

「あのゴーレムはフェイト達の攻撃を受け付けなかったから、少しでも戦力は増やしておきたいんだが・・・君のような強い力がね・・・」

「・・・強^{つえ}えて事は、それと同時に罪でもある。(ボソツ)」

良介が静かに言うと、クロノが分からなそうな顔で良介を見た

良介は静かに俯き、少しだけ表情が暗い・・・

「・・・分かった。君を管理局で保護しよう・・・」

「保護お？んな面倒な事いいんだよ。俺は旅さえできればそれでいい。保護なんて、面倒なことは御免だぜ。」

良介は一樣保護という形で管理局に入る事になった・・・

だが、良介の計画している気ままなぶらり旅が実行できるのは、相
当後になるだろう・・・

「・・・・・・・・・・」

良介の目の前には沢山の管理局員がこちらを見ている・・・

その視線は憧れの様なキラキラとした視線で・・・

良介は管理局に保護されるという形になったので、一様局員に挨拶のようなことをしなければならぬらしい。

「どうも。西田良介だ。・・・以上。」

良介の適当な自己紹介が終わり、クロノは少し呆れた顔で良介を見た

「他に言うことは・・・」

「ねえ。つか、言う意味ねえし。」

良介がめんどくさそうな顔で静かにいい、その場を去ろうとしたが、いきなり人に囲まれ、良介は質問攻めに合う事に・・・

クロノはとっさに回避し、良介が質問に埋もれるのをただ見ていた。

・
・

こうして、良介は保護され、管理局での日常を過ごすことに・・・
だが、彼に休息を与えまいと、また新たな敵が近づいていること
も知らずに・・・

八話 改造改造って、失敗しても知らねえぞ！

「くそっ！！！！なんなのだ奴は！！！！」

レイグはモニターに映る良介の戦闘データを見ながら言った
レイグ特製の魔力計測装置を使い、良介のインフェルノドライブ等の威力を測ろうとしているが
全て「計測不能」と表示され、良介の力が未知の力と知った

しかし、気になるのは魔力の根源と言える「リンカーコア」と呼べる物が存在しないのだ
つまり、彼はリンカーコア以外の物からあの膨大で強力な魔力を手に入れているのだ

「・・・レイグ、俺が行く。」

「デュアル！？貴様、何を考えている！？奴の技を見ただろう！？」
デュアルが静かにレイグに近づき、言った
デュアルの目には何かを決意した思いが込められており、その瞳をじっと見つめ、ゆっくりと頷いた

「・・・分かった。だが、くれぐれも無茶はするな。無理だと思ったらすぐに転送魔法で帰還しろ。」

「了解。・・・それと、アンチゴーレムの使用の許可を貰いたい」

「あ、アンチだと！？あれは一度暴走したら止まらないのだぞ！？」

レイグとデュアルが研究し、最初に作ったゴーレムがあった・・・しかし、そのゴーレムは小さく、とても管理局を破壊できるほどの大きさはなかった

だが、レイグは改造に改造を重ね、出来上がったのがアンチゴーレム・・・

力や、魔力等を計算しても、通常のゴーレムを軽く凌駕する。

しかし、ひとつだけ欠点があった

それは「一度暴走すれば、全てを破壊するまで元には戻らない」という物だった

アンチゴーレムの試作運転をしたのだが、アンチゴーレムが暴走し、何もない世界だから良かった物を、辺り一面を焼け野原にしたのだ確かに、あのゴーレムを使えば簡単に終わるだろう。

しかし、あまりにも危険すぎる・・・

「・・・もしも、アンチゴーレムが暴走しても・・・大丈夫だろうか？管理局も破壊できる、尚且つ、あの男も始末できる。そうだろうか？」

「だが・・・」

「レイグ、管理局が憎くてあのアンチゴーレムを作ったのだろうか？なぜ迷う必要がある？」

「・・・分かった。許可を出そう。」

レイグが静かに言うと、デュアルはその場から去り、ゆっくりとアンチゴーレムの封印されている部屋へと向かった

ある

そして、良介が案内された場所には自分よりも少し歳の近い人達の集まる場所だった

みんな、杖などを持って魔法を唱える練習をしていた

良介は「面倒な奴等」と思いながらも、適当な席に座った

そして、待つ事数分・・・

自動ドアから巨大な男が現れた

見るからに熱血教師な彼を見て「これなんて訓練校？」と思いながらも、静かに先生を見た

「今日からお前達に教えるのは「魔法の属性」についてだ！！おっと、その前に「西田良介」！自己紹介をしろ！！！」

「（ちつ、嫌々な教官。）ういゝ。西田良介です。キャプテンを志望させてもらいます。んじゃ、手始めにドリブルの練習教えてください。ださーい。」

「貴様・・・ここをどこだと思っている！！サッカーの養成所ではないぞ！！！」

良介のポケを見事の突っ込んだ教官は良介を睨んでいた
しかし、良介は欠伸を一つし、教官の怒りに火をつけた

「ほお・・・貴様・・・なら、魔法の基礎6属性を答えてみろ・・・」

「世界には6つの属性が存在する。火、水、風、土、光、闇。火属性は攻撃などに長けており、水と風はサポート。土は目標の破壊に長けている。しかし、光と闇属性は稀にしか存在しないため、貴重な存在である。人はそれぞれの属性を使えるが、得意な属性、不得意な属性がある。」

すると、良介は両手をゆっくりと前にかざし、指と指の間に色の違う魔法をそれぞれ出現させた

「ば、馬鹿な！？6つの属性を同時に使用しているだど！？」

そう……

良介の両手には8つの魔法が出現していた

赤、青、緑、茶色、黄色、黒……

そして、氷の塊と黄緑色の魔球が出現している

「6じゃねえ。氷属性や珍しい草属性もあるんだぜ？あつ、この世界はそこまで発達してねえか。まあ、氷属性や草属性とかは分かっても……」

すると、良介は魔球を消し、新たなる魔球を出した

それは、無色とも言えるまるでシャボン玉の様な物だった

「貴重な鏡属性もあるんだからな。ま、大体こんな感じだろ？教官殿？」

「ぐっ……正解だ……座ってよし。」

「うーいー。」

良介は鏡属性の魔球も消し、その場に着席した

この時、その場に居た全ての訓練生達は驚きを隠せなかった・・・
有名な6属性を同時にコントロールし、さらに、自分達の知らない
属性までさらけ出した

西田良介・・・彼は一体・・・

その後、良介の化け物染みた魔力や、技術はこの世界の教官を圧倒
した

実技の試験で100メートル内にあるターゲット全てを破壊し、1
00メートル先にあるボタン押すだけと言う試験問題を命じられた
良介は過去最速の0.0058秒を記録した

もちろん、この時に良介のアクセルフォームが使用され、目をつぶ
った瞬間にはもうすでにターゲットが破壊され、良介はボタンを押
していたのだ。

当然、スローモーションカメラを使い、検証したが、良介が速過ぎ
るため、良介の通った後と思われる軌跡を見るだけとなった。

そして、色々ありながらも、西田良介の一日訓練生は幕を閉じた

しかし、彼はまだ気づいていない・・・

巨大な闇が自分に迫っている事に・・・

八話 改造改造って、失敗しても知らねえぞ！（後書き）

さて、ここで皆さんにお知らせしたい事があります。

本格的に受験をするため、更新がストップします。

来年の春に復活する予定なので、気長に待ってくださると嬉しいです。

次回は春になる可能性があるので、次回予告はしません。

それでは……………

雑談

「いえーい。この小説を書いているリュウガです!!」

良介（以下良）「一樣主人公の良介だ。」

なのは（以下な）「高町なのはです。」

フェイト（以下フェ）「フェイト・T・ハラオウンです。」

「さて、嬉しいことにこの小説が50000HITを超えましたー！わーい、パチパチー」

良「なあ、帰っていいか？」

「何故に!？」

良「いきなり呼び出されたと思えば、いきなりなんなんだよ・・・」

「まあまあ、気にしない気にしない。」

な「なんか・・・テレビ用意されてるんだけど・・・？」

「あつ、今から見せるのは、これの企画段階だった頃の奴。つてなわけで、ぼちつとな。」

ブウン・・・

それは・・・突然の出会いだった

『いてて・・・なんなんだコンチクショウ!!!』

少年は英雄の息子として生まれた少し変わった少年・・・

『あの・・・あなたは?』

『あ?通りすがりの馬鹿だ。覚えておきな。』

そして、出会った小さな少女・・・

この出会いが・・・全ての始まりだった・・・

『魔法少女リリカルなのは 時の番人 世界を超えた出会い。』

良「・・・なんぞこれ?」

「あつ、ちなみに、英雄の息子ってのはこっちから引っ張ってきた奴だから。」

良「なんだその設定!? スタ ・ エル ンの息子のカル・デユ
ミスみたいの設定!？」

「まあ、ぶつちやけそうだな。」

良「ぶつちゃけんや!!!」

フェ「あ……まだ続くみたい……」

良「なんですとお!?!」

『良介がなのはとフェイトと出会い……分かち合った……
そんな中、また新たな事件が幕を開けた……』

『お前達の魔力……闇の書の餌だ……』

闇の書と呼ばれる本に魔力が吸収されていく……

『おいおい……俺は騎士みたいなプライドや誇りなんてモンはねえんだよ。』

良介はめんどくさそうに頭をかきながらいった

『じゃあ、貴様はなぜそんなに強いのだ!!!』

『俺には、誇りもプライドもない。でもな……俺の中で決めた武^ル士道はある。お前達がしようとしてるのは……ただ、人を悲しませていることだ。』

そして……彼の前に現れたのは……

『もう、やっと見つけた!!!!!』

良介と殆ど似ている少年……

彼の未来を変えた・・・

しかし、変わってしまった未来に忍び寄る巨大な闇・・・
良介達は・・・どうやって立ち向かうのか・・・？

『魔法少女リリカルなのはStS 時の番人 最後の戦い』

良「・・・なあ・・・もうどうでもいい気がする・・・」

な「あ・・・あははは・・・」

「ってなわけで、受験が終わったら更新するかもしれない物を書いた次第であります！！！」

良「・・・なあ、この小説でも慶一って出るのか？」

「もちろん。」

良「・・・だよなあ・・・」

「ってなわけで、雑談コーナーでしたー。次回は受験が終わった時ですね、それでは」

九話 話し合う前に戦っちゃ駄目！

良介が管理局に保護され、面倒な訓練生としての生活を体験し、良介はこの世界ではありえないと言われている事をやり、この世界の住人では絶対に叩き出せない不可能な記録を残し良介はこの世界が自分の知っている世界よりも少しレベルが低い世界と認識した直後だった

・ドシン・・・ドシン・

何か、巨大な何かがこちらへ向かって歩いていく・・・

良介は管理局から借りた部屋の窓を開け放ち、外を見ると、肉眼で確認できるほどの大きな人形・・・

いや、ゴーレムが見えた・・・

しかし、この前のゴーレムとは違う・・・

闇の波動を感じる・・・

恐らく、改造に改造を重ね、無意識のうちに、闇の力を解放してしまったのだろう

「ほお・・・前の奴よか強そうだな・・・」

良介は服を着替え、外へと飛んだ・・・

『管理局本部に巨大な物が接近中！！急いで持ち場につき、これを迎撃しろ！！』

管理局の廊下が慌しくなり、シグナム達が急いで現場へと急行する。

・

そこには、この前のゴーレムよりは少し小振りだが、確実に前のゴーレムよりも強い黒いゴーレムが居た・・・

ゴーレムの肩に立っている少年がフェイト達に言い放った

「この前の男はどこだ！！奴との戦いを望む！！！！」

「俺、ここだぜー。とつつぁん。」

突然、自分の横から声をかけられた・・・

そこには、欠伸をしている良介が居た

ゴーレムは気づくことが出来ず、少年や、なのは達も驚いている

「お前が報告にあつた・・・」

「だったらどうした？俺と戦いたいんだろ？」

良介が足を組み、適当に手をぶらぶらと振りながら彼を見た
歳は・・・結構近い。

だが、彼の瞳には何か、不思議な感情を抱いた・・・

(こいつ・・・昔の俺にそっくりだ・・・)

そう思いながらも、静かに彼は言った

「なに・・・戦う前に質問がある。」

「なんなりと、どうぞ。答えられる範囲ならな。」

すると、彼は静かに良介に言った

「お前・・・世界樹戦争を知っているか？」

「ああ・・・知ってるとも。つか、その戦争根絶したの俺だし。」

世界樹戦争・・・

これは、数年前、全ての世界始まりの樹・・・

世界樹を我が物にしようとした男が現れたのだ

それ故に戦争が生まれ、罪無き人々が死んでいった

しかし、その戦争を根絶した者達が居た・・・

特殊な戦艦を真つ向から突撃し、中に居た者達を全て気絶させ、その戦争を起こした犯人・・・

「デインゴ・ランパデア」を捕まえたのだ。

彼は静かに笑い、言った

「そうか・・・なら、次の質問だ・・・お前に、リンカー・コアはあるのか？」

「あるわけやねえだろ。んなモン。俺達の魔力の供給源はそのリンカー何とかじゃなくて、俺達の流れる気全てだ。」

「なるほど・・・質問は以上だ・・・」

彼はゆっくりと立ち上がり、デバイスを起動した
良介は面倒だと呟き、ゆっくりと立ち上がった

「死ねエ！！！！」

良介にいきなり切りかかった彼・・・デュアルはあることに気づいた
それは、さっきまで居たはずの良介が居ない・・・

「おい、遅すぎだ。」

そう声をかけられ、後ろを振り向くと、ゴーレムの頭の上に腕を組
みながら立っていた

そして、ゆっくりと言った

「さあ、お前の罪を数えろ！」

「罪だと・・・何も分からない者が何を言う！！！！」

デュアルはアンチゴーレムのリミッターを解除し、ゴーレムの目が
赤く染まる・・・

その瞬間、爆発にも似たゴーレムの魔力が放出された

しかし、良介はまったく表情を変えず、静かに地面に着地した

そして、アンチゴーレムの頭に乗し、良介をにらみながら言った

「死ね！！！！」

そして・・・アンチゴーレムは動き出した・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6590i/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 融合する力を持つ者

2010年10月22日00時40分発行